

# RadioDays



## ラジオデイズ

声には、  
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」11月号（通巻第18号）  
2008年10月28日発行  
[発行人] 赤塚祐一郎  
[編集人] 大森美知子  
[発行所] 株式会社ラジオカフェ  
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F  
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281  
http://www.radiodays.jp

11

November Edition  
2008, vol.18  
Free of charge

この人の声が聴きたい◎11月

二遊亭円丈さん（落語家）

## 解体せよ！と、 その落語家は言った。

ラジオデイズの構想を練っていた二〇〇六年の夏、「無限落語」で円丈師匠の「寄席沈没」を聞いた。三遊亭丈二さんの「リサイクル課長」も神田茜さんの「停電の夜」も柳家小ゑんさんの「願い事屋」も秀逸だったが、このネタ下ろし作品はまったく種類の違うものだった。ご本人は「出だしは受けたけどもっさりしていた」と厳しい評価を下しているが、私は驚いた。落語家の社会的存在を支える寄席という場を破壊し尽くすという趣向はさぶん思い切ったものに思えたからだ。

その直後に自分のブログにこう書いた。「この手の奇想天外は他の誰にも出来やしなから、みんな、円丈の『寄席沈没』を聴いたことで満足してしまった。久しぶりに『闘う男』を見たような気がする」

寄席や落語の解体をテーマにした斬は、実はここに始まったわけではなく、円丈ワールドの形成過程で大きな意味を持つ主題である。いわゆる協会分裂騒動の二年後、三遊亭円生が亡くなって落語協会に復帰した円丈師匠は、二年振りの高座に「パニックイン落語界'80」をかけている。吉本興業が東京に進出して落語協会、芸術協会を破壊していくというストーリーは、協会分裂を振り返って若き円丈師匠が突き上げた闘いの拳だった。古典を「封印」し、新作一本に賭けるなら、自分の中で落語界を一旦解体しなければならぬ、と。また、八〇年代のバブル景気を背景に作ら



れた「国際噺家戦略」は、金の希少性より噺家の希少性の方が高い（！）と察した海外投資家たちが東京に殺到するという斬である。落語界は金融マーケットに転換し、噺家は芸術ではなく重量（オンス！）で価値が計量されることになり、投資競争はたちまち国際政治紛争に転化していく。これもまた解体劇である。

そのような円丈師匠に、私は、「闘う男」を感じた。でも、「ラジオの街で逢いましよう」のゲストでお迎えした時に、その感じ方は少し変わった。円丈師匠はこう語っている。

「失敗を恐れていると新作は出来ないんですよ。日本人は失敗を恐れていて、批判されることになれていないんだよ」

失敗を恐れるのは、多くの場合、失敗に伴う恥ずかしさや自責の感情を避けようとするからだ。なにせ自己愛が一番面倒なものである。円丈師匠もウケなければ不機嫌になる。その不機嫌は相当なものであると聞いた。でも、この人は、仏頂面をしながら、失敗と失敗がもたらす自己愛の傷と闘っているように見える。それはたぶん、なかなか勇氣のいることなのではあるまいか。

壊すには勇氣がいる。守り切るにも勇氣がいる。でも、一番大切なのは、失敗して失敗して、また失敗しても、次の「新作」に向けて失敗の準備をすることである。なにせ。人には、新作ばかりで古典がないのだから。（ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

### ただいま入会随時受付中！

会員（年会費無料）になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄り下さい！  
<http://www.radiodays.jp>

#### 〈対話・放談〉

小林秀雄賞受賞の気鋭の思想家 家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川完美が輝々たるお客をお招きして語り尽くすダイアローグシリーズが好評。音の旅「小糸川・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」もお届け中。さらに芸能史研究家の山本進さんが一問一答形式で落語の疑問に答える「たのしい落語」、文化人類学者の西江雅之さんと詩人の小池昌代さんのことはをめぐる異色の対談「文化人類学者と詩人の異郷ランプリング」が新登場。どちらも現在、第一回を無料ダウンロード中です。

#### 〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優馬丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さんの朗読の「水仙」も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三郎朗読による江戸井で聞く落語調「ゴリ」「外套」「鼻」も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

#### 〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源 百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じさせる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

# オリンパスシンクする寄席

【日時】11月13日(金)午後6時45分開演(午後6時15分開場)  
【場所】関交協ハーモニックホール(西新宿)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

## 立川談笑

(七かわ・たんしょう)

落語立川流。二〇〇五年真打昇進。「こんにやく問答」ならぬ「シンカバ問答」、「ツボ算」改め「うす型テレビ算」と古典落語をあらゆる方向から解体し、ニュースや社会ネタを織り込んで再構築した型破りの落語を次々と放つ鬼才。独演会は常に完売の人気ぶり。社会問題を扱うテレビレポーターとしても活躍中。



## 春風亭百栄

(しゅんぷうてい・ももえ)

春風亭栄枝に入門。九月に真打昇進、栄助改め百栄。日常で見かける個性的な人を徹底的に観察しリアルに演じる新作落語に定評がある。趣味は「においかぎっこ」とやや怪しいが、だんだん引き込まれ終にはやさしい気持ちを手繰り寄せてしまう。古典落語のDNA変換で世界を驚愕させる、やさしい国際派！



# 明烏い話

連載第19回

本田久作



私は渋い芸、枯れた芸を認めない。そもそもそういう芸を見たことも聞いたこともない。私はかつて名人と呼ばれた噺家の晩年の斬を聞いている。ほとんどが録音でだが、その内の数人は生の高座で聞いた。そのどれもが枯れていなければ渋くもなかった。一言で言えばただただ無惨なだけである。寄る年波には勝てないどころか、年齢になぶり殺しにされている場合すらある。それは彼らが渋い芸、枯れた芸を目指さなかったからだ。いつまでも自分たちの最盛期の高座を思い描きながら、どうしてあの頃と同じ芸ができないのかと最後までじたばたしていたからである。それは老醜ではあるが、私は清いと思うし正しいと思う。文楽は一つの斬をいつも同じようにしかできなかった不器用な噺家であった。だが、年齢はそれを許さない。老いるということは人に激しい要求をしてくるものなのだ。しかもその要求はすべて「くをするな」「くはできない」「くは無理だ」という形で行われる。それなのに文楽は晩年も全盛期と同じ高座をつとめようとした。それは文楽が不器用だったこととは関係がない。文楽は自分が年をとったことに納得がいかなかったのだ。ふだんの生活の中でなら年

老いたという自覚はあったかもしれないが、生活と高座は別物である。ましてや年老いたという自覚があるのと、そのことを納得するのはまるで違う。

志ん生は倒れてから半身が不自由になったが、やはりそのことを自分では認めていない。片方の手が満足に動かないことは事実としてあるが、それと落語を演ることとは関係がない。もちろん関係がないはずはないのだが、当人だけはそれを認めないし、認めたくない。認めれば自分の芸を変えなければならぬ。運良く芸界には年寄りのための渋い芸、枯れた芸という逃げ道がある。けれどもだからこそ志ん生は枯れなかったし、渋くもならなかった。文楽も同じである。

そういう意味ではスポーツ選手の方が立ち回りはずっと上手である。というか勝ち負けはつきりしている彼らは、どれほど自分の年齢を無視しても、回りがそれを許してくれないという事情もある。ところがピン芸である落語は当人さえやる気があれば、いつまでも高座に上がり続けることができる。といっても、彼らとて本当はわかっているのだ。自分がかつての自分ではないことぐらい百も承知である。けれども、赤いちやんちゃんを着せられたぐらい、年をとったと納得できるものではない。第一、六十歳など噺家では年寄りの内に入らない。だからこそ、噺家は老け方を誤る。けれども私は正しく年をとる芸人の斬など聞きたくない。

志ん朝にどれほど死の自覚があったのか私は知らないが、志ん朝は最晩年まで自分の斬のレベルを上げることしか考えていなかった。談志は高座で死にたいと言ひ、身体の不調を訴えるが、芸は枯れることはないし、渋くもならない。それどころか開き直って、若い頃より

かえって過激であったりする。おそろく徹底的にやって、けちよんけちよんに叩かれる前に死に逃げするつもりなのだろう。けれどもそうは問屋がおろさないことを私は知っている。三木助だつて、当人は死ぬつもりで知り合いを呼んだ時も死ねなかつたというではないか。おそろく談志は志ん生や文楽のように老醜をさらすだろう。だが、枯れたり渋くなつたりはしないだろう。繰り返すが、私はそれが清いと思うし、正しいとも思うのだ。

●ほんた、まゆさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の迷宮」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主左受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「儂の葬式」(按摩の夢)、「幽霊舞臺」(いずれも落語協会優秀賞)など

## 私の讀本ばなし 拾八

三遊亭兼好

### 『初天神』

落語に興味を持ち、はじめて寄席に行ったのが二十七才の春。そこで一番最初に出会ったのが今の菊志ん兄さん、当時の菊朗兄さんで、演じたのが「初天神」。これがとにかく面白くて驚いた。ほかの出演者はまるで記憶にない。そのくらい印象に残った。「覚えたい」と思った最初の咄。

### 『しの字嫌い』

「し」を使ってはいけないのに、いつも言ってしまう。もちろんまるっきりうけない大嫌いな咄。しかし「余計なことは言わないようにしよう」と反省を促してくれる大切な咄。

### 『厄払い』

はじめての会場で、マイクチェックをする時に必ずしゃべるのがこの咄。口馴らしにもなるし、おめでたい文句が並びいい立てだから話して気分も良い。近頃は家でもはじめにこの咄をしゃべらないと、落ちていてほかの咄の稽古が出来なくなってきた。そのくせ、二〇二二、四年高座では一度もかけてない。不思議だ。

# ラジオデイズ落語会スペシャル

「日時」11月8日⑤午後2時開演(午後1時30分開場)  
「場所」関交協ハーモニックホール(西新宿)

数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれていく落語。それを自家菜籠中に演じざる現代の噺家たち! あつと驚く切り口で語りきる新作の斬新さ。人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。

## 笑福亭福笑

(しょうふてい・ふくしょう)

一九六八年、六代目笑福亭松鶴に入門。笑福亭一門のなかでも爆笑派で、古典・新作を自在に操る。奇抜なアイデアと独特の世界に、地元・関西には多くの熱狂的なファンが存在。上下を使わないしゃべりの型は迫力がある。平成十年上方お笑い大賞審査員奨励賞。趣味は飲酒、恋愛。



## 林家しん平

(はやしや・しんへい)

林家三平に入門。三平没後こん平門下へ。一九九〇年真打昇進。メリハリの利いたテンポよい落語は、どこかノスタルジックで哀愁をおびた世界観が特徴。趣味はフィギュア、怪獣、ヒーロー。自主映画製作では特撮もこなし、落語だけにとどまらないマルチな才能を各所で発揮している。



# こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑬

柳亭こみち



何かに一生懸命な人の姿は美しい。私が言うのもおこがましいが、口馴れない落語を一生懸命演じる前座さんの高座は目が放せない。「はじめてのおつかい」なんて番組は罪だ。懸命に奮闘する子供の姿に、放映時間中涙が止まらない。年なのか?

毎年秋の楽しみは師匠の長男(通称「秀君」)の運動会。子供の運動会は琴線に触れる。なかでも徒競走は、勝っても負けても全力疾走する子らの姿にやたら感動する。秀君が6年生の年は、目玉の演目が組体操だった。

今時、応援席には応援そっちのことでビデオ撮影に動しむ親がずらり。しかしうちの師匠は違う。「撮影なんかより一生懸命応援してこそ運動会だ。カメラより自分の目で、子供の勇姿を見届けるべき」と力説している。

いよいよ組体操。小柄な秀君は最前列。笛に合わせてたきびぎびした演技は見応え十分だ。思えば秀君と私演技の練習を二人でしたっけなあ。扇や肩車、倒立などお互い髪をボサボサにして。技が決まると誰よりも力強い拍手を送るのは応援席最前列の師匠。一方おかみさんは、町内会の皆さんと声を張り上げる。他人の

子にも精一杯の声を援けられるうちの町内会のシートは、宴会も兼ねて大変な盛り上がり。皆声をそろえて「いぞー! 秀くん!」。

のどかで優しい日曜日の午後だった。

●りょうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、香妻流名取、香妻巻。落語協会野球部・チームR所属。

## 味な脇役・話芸のきまり文句

連載第18回

# 交際



松井高志

講談や落語では、目の寄るところへ玉が寄る、同気相求め同病相憐れむ、などとよくいう。放つておいても人は気の合う者、似た者同士で自然に群れる。だから、つき合っている友達を見れば、概ねその人物の本性が知れる。こういうのを

その人を見るにはその友を見よ

という。六代目圓生の落語「一文借し」にこの諺が出てくるが、だから「友達はいいのとつき合わなくちゃいけねえ」というストーリーな教訓がこれに続いて登場人物の口から出てくる。

交際相手を選べば、利得があるという諺、というよりも「きまり文句」には、人は三者につき合え

というのがある。これはたとえば講談の「慶安太平記」などにしばしば出てくる。「三者」とは何かというところ、

医者・智者・福者

なのだそうである。たしかにこの三者と懇ろになつていけば、少なくとも損はなさそうだ。以上は交際相手の選び方についてであるが、では、人とのつき合いを断つ時はどうすればいいか。

人はただ仲良きうちに遠ざかれ  
名残惜しきを後の形見に

気が知れるうちに無遠慮になり、互いの醜さが知れてくる。嫌な思いをして結局別れるのであれば、所詮元々は他人同士、仲良く親しみあううち、良い想い出の残るうちに、それとなく距離を取って疎遠になっていく方が賢明である、ということ。これは講談「正直車夫」(四代目邑井貞吉)に出てくる。が、実際に「仲良きうちに遠ざかる」のは至難の業である。鮮やかにできるといふ人がいたら、筆者はとてども羨ましい。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月に、落語・講談記に出てくるあて字、難読語をドリル形式にまとめた新刊「ナンドク【難読漢字自習帳】(バズリコ)が発売された。『話芸』きまり文句辞典」サイトは <http://wagidion.cooplog.innity.com/>

## ラジオデイズ若手噺家の会

【会場】お江戸日本橋亭 「本戸懸」15000円(税込)  
【時間】午後7時開演(午後6時30分開場)

●第3回 12月2日◎

三遊亭王楽 古今亭菊六  
三笑亭夢吉 柳亭こみち

※ご予約受付中。ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―二二二〇より、先着順です。

## オリンパスシンクくる寄席

【会場】お江戸日本橋亭 「本戸懸」20000円  
【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第19回 12月17日◎

昔昔亭桃太郎 瀧川鯉朝  
※ご予約受付中。ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―二二二〇より、先着順です。

## ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定 (深夜のお客様)

10月28日 服部篤子 (社会企業研究家)

11月4日 瀧川鯉昇 (落語家)

11日 原信夫 (ジャズミュージシャン)

18日 岡崎武志 (ライター)

25日 片岡輝 (東京家政大学名誉教授・詩人)

## 神無月の落語会ふたつ

10月21日はラジオデイズ一周年記念オリンパスシンクくる寄席プレミアム。新宿住友ホールに三百人近い老若男女が駆けつけてくださいました。瀧川鯉昇・柳家小ゑん・柳家喜多八・三遊亭遊雀という四人の人氣真打ちが登場する豪華版！緊張気味の会場の雰囲気を開口一番の柳亭こみちさんが「権助魚」で和ませてくれました。お次は遊雀師匠で「七段目」。芝居好きの若旦那が丁稚を相手に大立ち回りで会場を笑いの渦に巻き込みました。続く小ゑん師匠は打つてかわったメルヘンチックな「新・竹取物語」で大勝負！篠笛の響きが叙情的なラストシーンを盛り上げ大拍手！仲入り後は鯉昇師匠の「持参金」。借金催促に困った男が持参金目当てに嫁を貰うが……。師匠はさらりと演じて濃厚な後味を残します。さてトリは天下の喜多八師匠！得意ネタ「将棋の殿様」で締めつけてくれました。将棋好きの若殿様、家来を相手に手前勝手なルールで勝ちまくる。そこで老臣が登場し若殿の心得違いを諭すという勸善懲惡の武家噺、スカッと爽やかに笑わせてくださいました。最後は全員揃ってのお楽しみトークでもうひと笑い。小ゑん師匠の号令一下会場一体となった三本締めの大拍手にスタッフはウルウル何たる幸せ。有り難いお客様と出演者に幸あれ！

30日は第17回オリンパスシンクくる寄席。

三遊亭歌之介と古今亭今輔の中堅若手対決！開口一番は何かと話題の小朝師匠の弟子、春風亭ぼっぼさん。かわいらしい姿

に似合わず？艶っぽい「悟気の独楽」で、ご機嫌を伺います。続いて大名跡襲名後

ほっと一息の古今亭今輔師匠が登場。ワルに成り切れない善人達が悪ガキどもに立ち向かうネタ「ワルの条件」で笑いを取りました。続く三遊亭歌之介師匠は、代表作とも言える当たりネタ「幕末龍馬伝」。坂本龍馬の怒濤のような人生を地噺に絡めて面白可笑しく語ります。地噺芸は師匠の独壇場ですねえ！仲入り後は今輔師匠。「国士無双」で三国志の世界と現代、夢と現実が交錯するサスペンスタッチの作品に。着想のおもしろさと浅ましい凡人の悲喜劇で笑えます。トリはもちろん歌之介師匠で、ネタは「お父さんのハンディー」。子供の高校合格祈願で大好きなゴルフ断ちをしているお父さん。モノゴト全てがゴルフに見えてしまう。ここでも地噺と物語が交錯して歌之介独自の世界に引き込まれる。恐るべし！歌之介師匠であった。

(ラジオデイズ寺和尚)



## オリンパスシンクくる寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクくる) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★Rの公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクくる) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

### シンクくる (Sync ★R) とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

## ラジオデイズの窓から

新宿御苑は、ナンテンが赤い実をたくさんつけ、通勤時の足元はドングリの実でいっぱいになってきました。

「ラジオデイズ」では一周年記念イベントをはじめとした音声コンテンツを続々とリリース中。どのジャンルもますます充実してきており、新宿御苑に負けず劣らず、こちらも実りの秋を迎えております。秋の夜長のお供を探しに、ぜひお越しください。

